様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１０１０３
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３０６６

研究課題名（和文）ツングース語族における地域的分布と類型論的相違の相関性について

研究課題名（英文）Correlation between geographical distribution and typological variations in Tungusic

研究代表者
ＢＡＥＫ　ＳＡＮＧＹＵＢ（BAEK, SANGYUB）

室蘭工業大学・大学院工学研究科・准教授

研究者番号：６０７８８９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ツングース語族に見られる地域的分布と類型論的相違の相関性を明らかにし、同現象を周辺言語との接触に起因するという地域言語学的観点から考察することを目的とする。その研究成果として、6つの文法特徴【1)サハリン地域に分布するウイルタ語、アイヌ語、ニヴフ語における複数接辞の用法、2)第Ⅲ群のツングース語族におけるウイルタ語の特異性、3)同主語副動詞語尾を用いた異主語文、4)北ツングース語族とコリマ・ユカギール語との類型論的類似性、5)ツングース語族における定動詞直説法の時制体系、6)ツングース語族における目的節形成形式】に見られる類型論的相違を周辺言語との言語接触の観点から解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ツングース語族内部の類型論的相違を明らかにすることで、議論が分かれているツングース祖語の再建に資する学術的独自性をもつ。また、いまだ不明のままであるアルタイ諸語における類型論的類似が地域的分布による接触の結果であるか否かが明確になり、アルタイ諸語の系統・類型論的研究への貢献できる。さらに、ツングース語族は、話者数の激減に伴う消滅危機に瀕している少数言語であるため、少数言語の保存・保持の面においても、社会的な意義を有する研究でもある。

研究成果の概要（英文）：This research aims to concentrate on typological variations in grammar among the Tungusic languages in accordance with geographical distribution of each language and analyze it from the perspective of areal linguistics. As a result, this research concludes that grammatical variations among Tungusic in the following linguistic features [1)the use of plural suffix in Uilta, Ainu and Nivkh, 2) grammatical peculiarities of Uilta among the third group of Tungusic, 3)different-subject sentences with the utilization of same-subject converbal endings, 4) typological similarities between North Tungusic(Evenki and Even) and its adjacent language Kolyma Yukaghir, 5) distinctions in tense system of finite indicative verbs in Tungusic and 6) variation in purposive elements in Tungusic] may be attributed to language contact with different neighboring languages.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学　地域言語学　ツングース語族　言語接触　言語類型論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

東シベリア、ロシア沿海州、サハリン島、中国東北、新疆ウイグル自治区ロシア領と中国領の広い範囲にわたって分布するツングース語族は、同系の言語間に顕著な類型論的相違が見られる。その要因の一つとして、系統の異なる多様な言語と隣接し、互いに影響しあってきたことが考えられる。しかし、無文字の言語による文献資料の制限、話者数の少ない消滅危機に瀕している少数言語、該当する言語に関する研究者の不足などの理由で、ツングース語族における言語接触の研究は、まだ初期の段階にとどまっている。

２．研究の目的

本研究は、ツングース語族に見られる地域的分布と類型論的相違の相関性を明らかにし、同現象を周辺言語との接触に起因するという地域言語学的観点から考察することを目的とする。

３．研究の方法

本研究は、ツングース語族と周辺言語に焦点を当て下記の手順に沿って研究を実施した。
1) 類型論的パラメータ設定：本研究で対象とする類型論的パラメータの確定
2) 文献研究：記述文法、テキスト資料、先行研究を参照し、ツングース語族における類型論的相違を示す記述及び用例収集
3) 周辺言語との比較・対照：類型論的相違が見られたツングース語族の周辺言語にも同じ類型論的なパラメータを適用し、ツングース語族との比較・対照
（※COVID-19 により、当初予定していたロシアサハリン島における実地調査は中止）

４．研究成果

本研究課題から得られた研究成果は、以下のとおりである。

1) <u>地域類型論的観点から見たサハリン地域に分布するウイルタ語，アイヌ語，ニヴフ語の定動詞における 3 人称標示と複数接辞の文法的類似性について</u>—サハリン島に分布するウイルタ語（ツングース語族）、アイヌ語、ニヴフ語における複数接辞が、名詞でも動詞でも生産的に用いられ、名詞では複数表示、動詞述語では動作主が 3 人称複数であることを示し得る点において、共通していることを明らかにし、サハリン島の 3 言語に限っての言語接触の可能性を提起した。

2) <u>第Ⅲ群ツングース語族におけるウイルタ語の文法的特異性</u>—ウイルタ語と同じく第Ⅲ群のツングース語族に属するナーナイ語、ウルチャ語の類型論的相違について考察を行い、①奪格・共同格の有無、②特定格と否定形の共起による分析的欠如表現の有無、③可能関連補助動詞の分布、④前置型・後置型否定構造の有無、⑤複数接辞*-l* の使用、⑥条件副動詞*-mi と*-rAki-に見られる指示転換において、ウイルタ語が、ナーナイ語、ウルチャ語と異なる類型論的特徴を有していることを示した。興味深いことに、これらの類型論的相違がウイルタ語と隣接している第Ⅰ群のツングース語であるエウェンキー語と共通していることも確認できた。

3) <u>ツングース語族における同主語副動詞を用いた異主語文</u>—ツングース語族の同主語副動詞語尾による異主語文に関する研究を推進し、条件又は理由用法の複文において、従属節と主節の構成員が所有関係である場合、従属節と主節の構成員の入れ替えが生じる場合等の環境で、同主語副動詞を用いた異主語文が許され、同現象はツングース語族全般に見られること、またツングース語族の地域的分布による差異も見られることを指摘した。

4) <u>北ツングース語族とコリマ・ユカギール語における文法的類似性について</u>—ロシア東シベリア地域に話される北ツングース語族（エウェンキー語、エウェン語）とその周辺言語であるコリマ・ユカギール語を対象に類型論的類似性について考察した。その結果、①定動詞（直説法）の時制体系、②定動詞（直説法）3 人称表示における数の対立、③アスペクト表示の形態/統語法、④特定格と否定形の共起による分析的欠如表現、⑤指示転換の観点から見た条件形、⑥相関構文において、両言語間に文法的類似が見られることを明らかにした。

5) **地域言語学的観点から見たツングース語族の定動詞直説法の時制体系**—ツングース語族における定動詞直説法の時制体系が、ツングース語族の地域的分布によって相違（北ツングース語族：非未来・未来、東ツングース語族：過去・現在・未来、南ツングース語族：非過去、未来専用形式の欠如）が見られ、周辺言語における定動詞直説法の時制体系と類似していることを示し、言語接触の可能性を提起した。

6) **地域言語学的観点から見たツングース語族の目的節形成形式**—ツングース語族における目的節を構成する形式がツングース語族の地域的分布によって異なっていること（北ツングース語族：目的副動詞（遠命令形と同じ形式）、東ツングース語族：目的副動詞（遠命令形と異なる形式）、南ツングース語族：目的副動詞の欠如、目的後置詞の使用）を明らかにした。

以上の研究成果から、ツングース語族における地域的分布と類型論的相違が相関していることが明らかになり、同現象はそれぞれ異なる周辺言語との言語接触による結果であることが考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 白　尚燁	４．巻 12
２．論文標題 地域言語学的観点から見たツングース諸語の定動詞直説法の時制体系	５．発行年 2022年
３．雑誌名 北方言語研究	６．最初と最後の頁 147-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 白　尚燁	４．巻 11
２．論文標題 地域類型論的観点から見たサハリン地域に分布するウイルタ語，アイヌ語，ニヴフ語の定動詞における3人称標示と複数接辞の文法的類似性について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 北方言語研究	６．最初と最後の頁 69-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 BAEK Sangyub	４．巻 0
２．論文標題 Grammatical Peculiarities of Uilta in the third group of Tungusic	５．発行年 2021年
３．雑誌名 津曲敏郎先生古希記念集	６．最初と最後の頁 171-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 白　尚燁	４．巻 10
２．論文標題 北ツングース諸語とコリマ・ユカギール語における文法的類似性について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 北方言語研究	６．最初と最後の頁 171－185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 BAEK SANGYUB
２．発表標題 Differences of purposive markers in Tungusic from the perspective of areal linguistics
３．学会等名 Seould Internationational Altaistic Conference 2021（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白　尚燁
２．発表標題 地域言語学的観点から見たツングース諸語の定動詞直説法の時制体系
３．学会等名 日本北方言語学会 第4回大会（兼国際シンポジウム）
４．発表年 2021年

１．発表者名 白　尚燁
２．発表標題 ツングース諸語における目的節形成形式とその用法の相違について
３．学会等名 2021年度第1回「「アルタイ型」言語に関する類型的研究(2)」共同利用・共同研究 課題研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 白　尚燁
２．発表標題 Grammatical Peculiarities of Uilta in the third group of Tungusic
３．学会等名 the 2nd Conference on Uralic, Altaic and Paleo-Asiatic languages（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 BAEK SANGYUB
２．発表標題 地域類型論的観点から見たサハリンのウイルタ語、ニヴフ語、アイヌ語の定動詞3人称標示
３．学会等名 韓国アルタイ学会全国学術大会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白　尚燁
２．発表標題 第Ⅲ群ツングース諸語におけるウイルタ語の文法的特異性について
３．学会等名 北海道言語学会20回例会
４．発表年 2020年

１．発表者名 BAEK SANGYUB
２．発表標題 ツングース諸語における同主語副動詞を用いた異主語文
３．学会等名 東京外国語大学アジアアフリカ研究所共同利用・共同研究2020年度第3回「「アルタイ型」言語に関する類型的研究（2）」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 白　尚燁
２．発表標題 ツングース諸語とユカギール語の文法的類似性について
３．学会等名 日本北方言語学会
４．発表年 2019年～2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関